

『婚約者は俺様若社長!?!』

著: 若月京子

ill: 明神 翼

そんなふう二人で話をしていると、黒塗りの高級車がすぐ目の前の道路に停まる。帝人の車とよく似てるな…と思ったら、扉を開けて出てきたのは帝人本人だった。

「帝人!?!」

八尋は驚きの声を上げ、マジマジと見つめる。

帝人は口元に笑みを浮かべているが、目は笑っていない。まるで敵と対するときのように、剣(けん)呑(のん)な光を放っていた。

そのくせ、表面上はにこやかな笑顔なのがかえって恐ろしい。

『ヒューイ・ドラゴさんですね。はじめまして、八尋の恋人で、一生のパートナーの、帝人・鷹司です』

恋人と、パートナーというところをことさら強調して、帝人は八尋の首筋を撫で、肩に手を置く。

その親密さを見せつけるような触り方に顔を赤らめた八尋のこめかみに口付け、ヒューイには分からないようにギロリと八尋を睨みつけながら優しい声色を作って言う。「今日は、出かけるとは聞いていなかったぞ。相変わらず、古本屋巡りが好きだな。忙しい日が続いたから、付き合っただけで悪いな」

口ではそう言いながらも、八尋には帝人の心の声が聞こえる。ヒューイとまた会ってるのはどういうことだと、激しく憤(いきどお)っていた。

「あー…うー…この前の会食のとき、古本市のことで盛り上がりね。日本には古書店街があるって話になって、ボクはわりとよく通ってるから、それなりに案内もできるかな…と。それに、しばらく来れなかったから、ボク自身も来たかったんだよ。いいだろ、別に」

最初こそしどろもどろだったが、よく考えれば何も後ろめたいことはしていないと、八尋は胸を張る。

「悪いとは言っていないぞ。今日は天気もいいし、外出したくなる気持ちは分かるからな。……でも、そろそろ帰らないか？ 一緒に買い物をして帰ろう」

聞いたことのないような甘ったるい声で話しかける帝人に、八尋はゾクゾクとした悪寒を覚えて鳥肌を立てる。

まるでホストのような甘さは帝人には縁のないものだったので、どうにも気持ちが悪くて仕方なかった。

使っているのが日本語でも、口調や声の調子はヒューイに伝わる。

『ヤヒロから心配性だと聞いていたが、どうやら本当のようだね』

『こんな美人の恋人を持てば、誰だって心配性になりますよ。困ったことに私の恋人には魅力がありすぎて、ただ歩いているだけでも男が寄ってくるのでね』

『確かにね。一緒に歩いていると、男たちがチラチラとヤヒロの顔を見ていたよ。あれでは、君がボディガードをつけるのも納得だな。私でもそうするし、きっとどこに出かけるのでもついていってしまうだろうね』

『それができたら、私も少しは安心できるんですけどね。なかなかそうもいかないのに、八尋がおかしな男(\\ \\ \\ \\)に目をつけられるたびにハラハラしてしまうんですよ。八尋に惹かれる男は、夏場のゴキブリ(\\ \\ \\ \\)のようにゾロゾロ現れて、嫌になります』

帝人は『おかしな男』と『夏場のゴキブリ』という部分をことさらにドスをきかせた声で言うと、ヒューイをギッと睨みつけた。

二人の会話を聞いて、八尋はあれっと思う。

ヒューイには恋人が男だとバレないように気をつけていたはずなのに、帝人が現れて恋人だと名乗っても、まったく動じていないのだ。

『八尋は夕食作りがあるので、そろそろ失礼します。八尋、今日は煮物が食べたいな』

帝人はそんなことを言いながら八尋の頬にキスをし、ヒューイに向かって今度は不自然なほど朗らかな笑みを向ける。

『八尋の料理はとても美味しいんですよ。何しろ、愛情がたっぷり込められているので。恋人の手料理というのは、それだけでも嬉しいものですがね。おかげで、仕事で出張したりすると、八尋の手料理が恋しくてたまらなくなります』

『それはそれは、羨ましいですね。私もヤヒロの手料理を食べてみたいな』

『あなたは本国に恋人がいらっしゃるでしょう？ 早くアメリカに戻って、恋人の手料理を堪能したらいかがですか？』

『あいにくと今は、一人なんだよ。二週間前に別れたばかりでね。アメリカの女性は強すぎる傾向にあるから、ヤヒロのようなたおやかな恋人がいる君が羨ましいよ』

『これはこれで気が強いですよ。そこがまた可愛いんですが』

そう言って帝人は、今度は唇にキスをする。

テラス席となっているここは、通りに面している。一応、観葉植物が目隠し代わりになっているとはいえ、まったく見えないわけではない。

金髪で大柄なハンサムな外国人と、日本人にしては大柄なハンサムな男。それに野暮ったいメガネをかけていても、本来の美貌が隠しきれていない八尋を挟んで飛び交う火花が見えるかのような彼ら二人のやり取りは、人々の視線を集める。

同じテラス席の客たちは聞き耳を立てているし、通行人もチラチラとこちらのほうを見ながら歩いていた。

そこに唇へのキスだから、おおっという意図せぬどよめきが起こった。

「て、帝人っ」

二人の妙な圧迫感に押されていた八尋も、さすがにこれには非難の声を上げる。帝人との関係を隠すつもりはないが、外でキスをするのはまったく別の問題だ。

八尋が怒った顔を見ると、帝人はハッハッハッとわざとらしい笑い声を上げて先ほどよりも長いキスをしてきた。

『八尋は恥ずかしがりやだな』

「ここ、日本だからっ。外でキスなんてするな」

『なんだ？ 家でゆっくりたっぷりキスしようっていうお誘いか？ よしよし、希望どおり、帰ってからたっぷりな』

「誰もそんなこと言ってないっ。自分に都合よく変換するの、やめてほしいな」

しかも帝人はわざわざ英語で言っている。ヒューイに聞かせるためなのは明白だった。

『では、ドラゴさん。私と恋人は、ここで失礼させていただきます。車で送らせてますから、使ってください』

『それは、どうもありがとう。ヤヒロのおかげで本をたくさん買えたから、とても助かるよ。ヤヒロにはお礼をしないと』

『いいえ、そんなお気遣いは無用ですよ。滞在期間が限られているし、とてもお忙しいのではありません？ ヤヒロのことは気になさなくて結構です』

『ああ、少し滞在日数を延ばしたんだよ。せっかくだから、観光もしたいと思ってね』

『……そうですか。定番ですが、京(きょう)都(と)や奈(な)良(ら)は外国の方に人気があるようですしね。私ももうお会いすることはないと思いますが、楽しい滞在を』

にこやかに二度と顔を見せるなと言う帝人に対し、ヒューイもにこやかに言う。

『ヤヒロは私の大切な翻訳家だから、ぜひまた会って話をしたいね』

『八尋もこう見えて意外と忙しいので、それは無理でしょうね。では、失礼っ』

帝人は八尋の腰を抱えるようにして車へと戻り、後部座席に八尋を押し込む。

自身も乗り込んでバタンと扉を閉めると、とたんに帝人の表情がガラリと変わる。目を吊り上げ、イライラとした様子で怒鳴った。

「やっぱり、あいつは危険だ！ 絶対にお前を狙ってる!!」

「だから、それはないって。あの人からは下心を感じないし、変な目でも見られてないんだよ？ 狙ってるとか、ありえないってば」

「相手は百戦錬磨のプレイボーイだぞ。下心くらい、いくらでも隠せるだろう。だてに年食ってないんだから」

「そうかなあ？」

呑(のん)気(き)に首を傾げる八尋に、帝人の目がますます吊り上がる。

お前は分かっているとヒューイの危険を説き、懇(こん)々(こん)と説教をするのだった。

はいはいと聞き流していた八尋は、車がマンションに着くとホッと安堵の吐息を漏らす。

本文 p102～108 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>